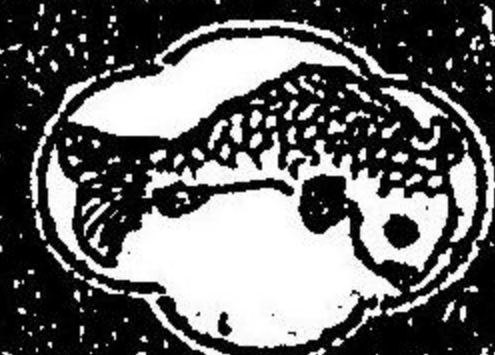


倭紫田舎源氏系圖



倭紫田舎源氏

六 九



光氏心かうちうなづきさて、娘のむら萩のまやうどのう
ちへすなかひおふしたるあらんとへだてのすぎとせづふ
とろみおあけたまへばあまたよりのけがねをささずや
まうととひらきけりこころやすしとまのびよるるれと
夢おもあらをふるこころおむける川次郎きりある母の空
衣お心をうけてくせけせもりかもわが子とよぶものお
いうでのまくらをのほすまさいひこらされてもこりすま
お父のるすあるうのうへおふよひのさわきをさいはひと
あしおとまのふらううぐら光氏と袖すりわひくらまほ
げおありあから母のこのみのゆりたびらまろがお紺の大
がたをうきと見とめて空衣がてをさよめにやいでつらん
と心およるこびてををれべいと母うへこよひわがはなを
をいうん男とねもふべき「母うへこよひわがはなを
もうしてさうせおぬらんたのまをわんらいますて子おて
此家へひろひとられしおれお父といふの名のみありう

のうへおあや人の室町とまよおて寶鏡をうとひとられて
せつぶくあしとてたまはねおぬねんみまだいとわ
き母うへのごけたてたまとんるれよりもちすなもあけれ
ばさはりもなき此川次郎とすあおかくらひとげたまへト
まおだれろむへさまと、おいひよるを光氏をのしとおほ
しめしものをもさらおのたまとすどらへたるてをうのま
と空衣がふしせちのくいざおひたまへば川次郎さてあ
る母の心とけこよひのまゆびをまねふせしとよろこおあ
しもちおつうすよるめさくるをつさけなち「母のたりの
るあのおれべいとつ家にいすみあがらまたくふとをも
うとさじとたきやらさいせんいひくるがトねはせおとつ
どうちたせろさねやもる火うげおねん顔を見おけてるの
まといれふしつ」おめあらさめよつおやさぬる光氏
やちらうに「さうさうあがらうしよきもおろあふるのも
まよふのこひわれもさいせんろのはうへとだりおたをら
じんととてちのひをたてしもうちわすれむら萩をねも

ひろめられおんこきおでまのびたりもしもねんめにとま
りあを家のめんぼく此うへあしとあんなちのねがひのあ
ひしつあつきのたおひむらひおこよといひすてまやう
とねしひらきたちいらたまふねやのうらるれあ母の空
衣と今さらいはんやうもあくねたまし顔にてわりがたま
まあはかなりとすへいふくす光氏のひたすらおむら萩と
あもひだがへさまではとるけしきもあくくしげきやう
だいとりとだせしうのあのをわけいらたまへばよきうち
うつぎたひひとりちいさやうおふふしおたるうへあるま
ぬをおしやるまでゆあをあしてあしもとのきたれるなら
んどあもふからめもさだめはのさめやらす光氏さまがふ
あをひろめ「めしたまふにまたがひてあつのがまげりあ
まぬりたりたけたうくおひのびしりまだ花さうぬをどよ
へしあがめいなくともむら萩ねがめおとふへいけたま
へトさいて空衣こころまおひまはあにとせんうあしやと
ものにおひゆるよとちしてあつとせうりおあさあがるお

もてによきのうちおゆひおとあもたてすふるひある光氏
ちうくすりよつて「うくらちつけにふうらぬ心の母と
とおぼされんが年ころおもひわたりたる心けらちをまら
せんとてわざと此家へうたたがひうくるあふせをまらた
るのあさくのあらとねにうもあたらだ何まじきおんけ
はひさすたにこころに人ありといひはとまらんもはしたな
く「人たがへにふるはんべらめといきまのまにすあたへ
ける光氏い何はりてかれがふるをひき見んとあをの
たはらをさりたまはず「人たがへどのうらめしくねん
をうれがし見ろめし山名三郎むねさよよりはるのいせ
んのああるがはやむねさよとちぎりをむすびろれゆえつ
れあくもてあすやさあらば何とますいひあらせよひろの
おたれむ事れあり。りふりふるのいさにてあまきの川次
郎がやうすを見おばるちが母の空衣も此あたりおふした
るあらんがたとへ母がさいたりともぬしあさ女にのま
ゆうがまたひよるのをあおがらおふきものありともまか



るまじサア〜せうちやトナうちたささいよ〜うち
 どけたまふお空衣こころおねもふやう今さらまふどの
 喜代之助が女房なりといはんおね志ゆうをいつはりうさ
 はぢを見せしめんぞおんいり此をせりのぎりのあ
 る川次郎までうさめや見ん又むら萩おなりおふせ志のび
 男をもちたりと此をのぐるうのときとまうしき娘お
 ぬまぎぬをさするもわびしとひとそぢみつらくもてあし
 まぬらせお君のうらをうらむりてうれとあしお思
 がつまへおんおくしとぐうるべきとあつてとさをりや
 ぶられずコハなおとせんりあしやとちおおねをかくだ
 きけるあ空衣がそのさいあんもどい志ゆくんをたはむ
 れおいつはりしよりおこりしおてよきよの人れいましめ
 なり。こしもと夏野のさきおより此どころへさわひしガ
 れもひもよらぬ事おもておあぐりのけんもどかぎとあ
 りよしさなくとも此事を人おあらさんうたてさおいさを
 のんで志のびる空衣がうちあくさまわはさど見をせ

光氏ハゆるしやらでせけうるおびもむぞハすひぢぢく
 ら」もはやとりおあつるおひつまでおのをあもはぞト
 よりうひたまへハ空衣ハるし此さまの喜代之助がゆめお
 や見んとあうろしく志よせんまをいつはりし此のど
 ぐをうまのあしをつとのかへりし其後お志やうがいせん
 と心をさだめえもんつくろひさつとあををり「うすなら
 ぬこにはんべとまこととこころのけたまといおんうを
 へまぬらせよと父おねはせをたまこるはづみだりがはし
 き此疑やへかろ〜しきお志のびハさらおまよととあも
 はまじトことわけとひもたをやかあつよき心をもちたれ
 ハ風お志おへまなよたけのをるもをらす光氏さき「兄
 川次郎ハ志よういんあれと父おいはぬのどがわやまりさ
 はざりあがらめづらしき心の女のあといひすてとこあた
 を見るへり。たれうあるさかへもてトねせお夏野がう
 や〜しくひろふたをもちいつれハ空衣さ何と顔あうめ
 のまがあおどのれもふらんとなぐるよまでおあせおあり

おやましげなるうのふせい屏風の外ハ川次郎ろり〜
 どうのよひよりさかへはをつてとますして光氏がねぢぬ
 すみどりうらうのくまへすのくれあるともあらずしてこ
 しもと夏野ねんおびとささげんと見れども〜ういくれ
 あしをりうらとりも志を〜あきたんのりものをうさ
 れよと庭さきおあすればこころあわてとわたらしくて
 うじねきたる喜代之助がねぢをもちいでねんうはりおわ
 たしもうせバひさむすびたらいでたまふお空衣もねみだ
 れぞがたどりつくろひあうらのおびをどらんとするおい
 うわうしけんこれもなしうさねがさねの事おさバありわ
 はせたるむら萩のおびひきまめてたらでるひまおさみお
 もいろきいでたまへハ川次郎御前おてをつかへかやうお
 いろがせたまはづと今朝の志ゆいつこんとすよめも
 せバ志志やくわり「嘘嘘へうつれるさまでいまづつと
 志まんト志づ〜と庭へれりたつねんけはハ空衣ハは
 ろりてさきとらまでねんみれくりとさげんようで見お

はと顔とたどまをりどたてさるお光氏みつとぎまのうつとり
とへだつるせまのこよりし何ひうりをさまるありわけの
月のまゑろわかげのふりあひくにかかしきわけのね
もひあるまの心もどまらすのへりまがらひいでたまひぬ
編者申す五編六編ごへんろくへんのそとくのまゆうをまうけん
とてのさくみればよきたまふおとづらとしくいさ
うきようのあひりしみるべしまづ馬うま之のものものぐた
り花はなのえんおてどきわくべし赤松あかまつ太た郎らうのものぐた
り明石あかしのまきをゆめらんもうけあり又小またがらす丸
のたうすくの事こと此このづきよりゆうがはのまきにくと
しくのべたれば此編このへんをたまひし人ひとおかしめらすと
てすてたまとすすゑくをもとめたまえらん事をゆ
つしきてねがふおあん
ろれよりも光氏みつとの嗟なげ嘆なげのやかたへうつりしが二葉ふたはのうへ
より此このほどいたへてわたりたまとぬようをふみおてさら
みきてえなればよるおのろまねども父ちちのゆるせし何ま

あれはさすが小すてよもおきぐたく又赤松あかまつのたちへおも
むき四五日よひうしておおはせしが中川なかつがわのやどりおてむら秋
どおもひたがへすでお寝ねやまでまればゆきし空衣からぎが事を
れみおもひにするよひまもあく人ひと志こころらすむねをいためあ
どつてやらんよすがあきをうらまうこちてぬたまふとあ
ろへ仁木川にきがわ次郎じらうの君吉きんきちをいさむいて御前ごまへへまぬりしとあ
ろきまのあれおとけたまえりすぐさますいさんいたせ
しゆきおをるをさあきものをさしあげたまゆふおてあ
り父喜代ちちきよ之助のすけのいまもつてきたくいたさす候さうらへともわ
りぐたさおはせのおもむき母ははうら衣きぬがうけたまえりおれ
おのじつおのじつの弟あにの事をゆめにもうすまでもあくすぐさまあ
ろをへさしおられおやくおいたすともせめてのお茶ちやの
うよひありとつとめさせたまねがひのだんくれく申まをし
きたたりとあどこまやうお空衣からぎがふよるのほどをさあえ
けきおあきさいとひのあかだちと光氏みつとひるのうちにうちよる
みひ川みひがわ次郎じらうのいとまをたまえりうの君吉きんきちは是こゝよりして

かたのらをとあらたまはすわがふれごどくいたよりしが
光氏みつとひるかおれたまふやう「あんぢにいふもはづあしけ
ほどとどかたよがひにやどりし其そのよむら萩はぎをおもひろめ
寝ねやまでまのひゆきたれどもたつれなくれみもてあさ
れ今いまにおもひたへがたし此このふみをひろかおわたしへんじ
をこふてきたるべしゆめく人ひとおあもらしろとおはせに
君吉きんきちいふかしく「ろのむら萩はぎどのたまふの喜代きよ之助のすけが娘
あるがいかあるひまにあらぬめおとまりといひくるを
うつけして「いのおとしがゆめとてこやうらわわすれ
しおさうづきがはりにあたへしびとむら萩はぎがよにえさ
せしおてろのとき姉あねとよびたるゆめをじめの何なにどのあん
ちをも喜代きよ之助のすけがすゑの子ことねもひたがへをむら萩はぎがい
ひ何なにどきしおあらざるやとお何なにせをきいて君吉きんきちのろのよ
姉あねの空衣からぎがむら萩はぎありとい何なによりしをおもひいだし
いだしあがらあめらさまにもいひがたくせんうたあげく
び御前ごまへをたち仁本にほんのやうたへたちうへり姉あねの衣きぬは部屋へや

おいらありし事ことどもくはしくうたりくだんのおん文ぶんさし
いだせお空衣からぎのあさましさにあまだこばれて君吉きんきちがおも
はん事こともとづかしくわがまのかげおあんふをうちひろ
げてよををとりもどれ如ごとくおまきをさめ「うくるふまの
見る人ひとあしと申まをおあげてこやふたよびやくたへりへる
事ことありれといひすてよたよんとおる姉あねのもすろをひきと
せめ「げんさいをつとのあるねんへちあらぬおふと
づうひのあんばうくるしけれどうたたがひおあいで
夜よむら萩はぎと名なをい何なにはりしるきをまよとよおぼしめしき
まにむむりのすあしもあひ。とにいへ貞女ていによのまをうひ
きおへんじおまことお事にあらすおあさきとくさきとのあれぎ
りおおぼしめしきりたまふとあわんあさきてくだされの
しとあもゆめぬわたくしをめしいきらきて光氏みつとをい
なつかしくかたらひたまひお何なにせをうけたる此このおふと見
る人ひとあしとてうへせとせられおあなたがごむたいあトあ
きぬをうりにいひけきバだうりおせめらき空衣からぎのあんと

のへさんてをみくおくのトまへにげ入をせきにせ
いておひゆく君吉「やれまらたまへトむら萩がまやうじ
たてまりたりふさぐり。いつおひのうはありめて母さま
とみおひさのひやうそをさうけてくださんせといひつゝ
あらゆるふとどりわけ此ふんでいのかしうおえんしよを
さあひ人がこんふことどりつたするもれでいなトあし
あだむるむら萩のことをもさらはみよへいらす「やうそ
あつて姉うへと光氏君よりくださるおふさうれうへして
たまはれトとらんとするをむら萩の袖ふりくしてはつあ
どわらひ「母上はあへんじのわたしがもらふてあげるは
とおあまへのまつごさしきおれまてまつてごせんせト
いふれいぐてんゆかねをもあしうへしてとばれもせずと
いふさどもお君吉のうけをたつて何きへおくむら萩の
たり見まはしてりやうし硯をとりいだし墨すりあがする
れどよろへお心なくさうさる夏野「あつといれおれ
へのおふみもうたうがれであくらうらうれてまよくをわ

げませうトてあうけらきてふりうへり「ひさしうぬやる
ろみたにのみおものくそ事いあひ君吉さまが此おふとを
もつてごさつて母さまへあげよういよやとるまいとわら
うふてごさるやうすををめお見たゆあふたりはお
つまやる事いさておねとどうまたわけのおとあまめも
しどりあげてつくく見ればあて名のとあろへららしが
き風おあひのぬむら萩のもとへとある光氏さまよりわ
たしのところへきたおふみとしけゆるぬあれお子ぐどり
ちがへて母さまへもつてあいであされたれといよやられ
の娘ぢやとさすがにああたまあつまやりうぬひよんあ事
でやり何うへし何わたしがめふうらぬとんとはて
つうぬとあろといひ何と又もふみくりうへしどうもがて
んけゆるぬれい何ややつれあうもてあしたとあうらと
れのすくこの此みにおぼえいあひ事あぐらむら萩といふ
名のあれはささる事いあらじひのるまことよにうたら
ふわかきとよりけれんふととこれとやうがにうみひし

事とねん返事ふでたやおかきまたよむむら夏野のねどろ
ささりし夜すがら空衣夕鏡やの事ども母のさけづるれい
まさしく人たがへとねもへとめのまへむら萩がよろあふ
ささあうくすどのいひいでがたくためらふうちねんうへ
り事うさあはり君吉よびて手おわたせば姉のふとすどこ
とろえていろがはしげお赤松のやうたへころのうへりけ
れ。光氏のげんぶくのぎしきいさる年すでおすみぬさる
おあお此たびの人おもえらさすまへがみをひらうおとら
はせずたうたちもまもぎむらひのさまおいでたちある
とまうの君吉をほとりちうくまねたたまひ「いつややろ
ちのもちうへりしむら萩がへんじおの兄川次郎が室町へ
どのいのるすおまのびこよあおの女ど一なればかたら
ふおいとやせしといひおみせしゆあいつやとはとまらわ
たりしがこよひころうの川次郎がむら町おさむらふよし
をさよあまたきあんちうねのよりものへわれをものせ
てあのをせよはやせんをとりたればさまで人めお

たちのせじトねはせおはつと君吉の心のろこふらちあど
ろさ姉うら衣がへんじおの若きこのとききりおあはしま
りたまふやう事をわけてりをつくしうとましまらんをね
もひしゆあよろこびてうへりしがさてりみさはをすてた
まふやああるとさおの今までのねんをわだかて喜代之助
へ此みもひとしくきりたすとあわんおくるよを光氏の
うれどもさらお心つうすはやくくどゆふやみの道た
とくしきうのまきさ君吉さまとれりものへてをとり
むりあおしいれてるれみもともおのりうつりかどあどさ
とぬるれささおいうがしたてとゆくほどあく仁木のやう
たわいたりしうべ「姉うへとようあつてまうりとをり候
ト君吉おのりものうらよりいはせたまふにすをさなき
もの事あればもんをんれいぎもせずとがめもやらで
やすくと庭ぐちよりあのびいりやがてりごよりたりた
ちたまひ「われのこきおてあらせをまたんろちのひらう
おはうらへとおほせに君吉せんかたあくさりとをたしけ

とふろへ君吉いろきとしりきたり「人めまげくておんい
 でれやうすのいまだ申しいです又ふろをりも候のめふよ
 ひのこきくわんわろをせとすよめを光氏さといれすとか
 くするまにうなたおのこをうちはてしとおぼしくてわら
 ひうよめき人々のたちとかるよけはひして「君吉さま
 〳〵どれおおいでなされませす此おさりとめめするト
 とひらをならす夏野がふふ君吉おとろさふりのへる袖を
 光氏ひきとめ」をりとをさしたるていおもてあしめん
 なのはやくうちおいりよくとくらへトのたまふをさくと
 ろのまよえんおわがり姉おやうすをのたらんとゆくと夏
 野がおしへだて「むらをささまともろともおわねぎとさ
 まのはやあやそみごようがわらばおそのあさあそやうあ
 わひわろをしませおあたれおとふのせのいるおまどれ
 もとへとりましたといさみひゆけせんのだあくまをし
 があひだろらねしてそれと事をはのらんとふろのた
 しりおもちあせとをさあまめれとまごめてまくらをど

るよりいちはやくねぶりてけつきたおひみし。光氏にい
 とさどくさお夏野がよびつるをりかの君吉がわどおの
 さびしさのうちへまのびいりたよよせたる屏風のあげ
 へはやのくるよどいたれあつてあるもれさらおあかりけ
 りさて空衣のさきにより君吉れふをさよ又わのぎとれ
 おんふををもてさしあらんとむねとるさをつどののへ
 りしうのうへあて事のまさいをつよますのたりいつはり
 もうせしいひわけおのやせんらくやとさをいためいと
 ねぐるしくめおはすおに心なくむら秋がよくまどろみ
 しだらうやましく顔をもたげてうちをやきバミあまづま
 りしさよなりおわやしやさら〳〵さぬのおとよしのまや
 うじにへだよりて火のはのらくて見えわかねとああた
 へみじろさよる人のげもしやろさうとあさましくろのよ
 のどにあつくりけきをうへおのけたるねりさぬのわは
 せをやをらぬぎすてつはだぎれすしひとへあてもする
 のりたへそへりいでのおおをよせいさるせず。光氏ハ

さぐりよりた一人りふしたるをよふろやすしとよりろ
 へバありしけとひおひさのへてもふくらのおかはもふ
 えまくらりのたへおのいやりて何とましげあまねすだた
 をあやしやこれのりしと見のへるふあたお空衣がさ
 しあしあけいおげいでんとあくるまやうじおさしあひ火
 うげたがひおまかはすうはと顔「ヤアむら秋うねをふく
 みてまゆげをこらひ」さとおもいつかおげんぶく「さて
 何をつどをもちたるうといふお光氏うのひまおうげを
 うくして空衣のいつらへゆきけん見えすなりぬ。今光氏
 がむら秋とよひゆる壁のねとよみいりむそめいやう〳〵
 めをさましあされたるけしきありしがつく〳〵おん顔う
 ちまもりうれとすありやうまたりけんおをかおもそろの
 さあせえもんつくろひ手をつのへ「おんめおうよりし
 事いあけれとああたのまさしく光氏さよ此むら秋をばい
 つのまにおんめおをまりてありがたいおんふとふだたく
 しがをさあいふで。かへり事うれをこらんわろをしてこ

よひの兄のるすなればあふしありしんをやうがあいふ
 おねてあたまひたる母さまのおとせぬのあいでのやうす
 をうまふとさとり母さまの此まくらをああたへあげよと
 おつまやらぬをかりおついでとさをとをしといひさして
 顔うちあうめ袖うちおほゆるのすたよのあかをまだよ
 くもぬぬのさまおのさきをまたり光氏みよろおおもふ
 やうさていさるふろむら秋といひし女の空衣にてそれと
 もあらずよひのはとかいままたりし此むすめむら秋お
 てありしよあまにのゆあおうわれをいつはりのといた
 ひ〳〵うさめを見わきおもものをおもとせしあらことろ
 えすとあはせともうちいでむら秋がうくといとんもい
 とほしく「おんみをとんとてさうしあろつたたがひおき
 つれどもいづくおうはひうくれうげをだお見せざりしう
 のうらとをいとんとてこよひまのひてきたりしあといひ
 まざらしたまひければいとわりやうあることろおひまこ
 とよあもひしふせいおてあをばづうしげのたちろひて

